

2017年9月
1127号

百葉

Manyoh

一冊の会 編集部

〒160-0015 東京都新宿区大京町5
(一冊の会研究室)

伝えよう、『一冊の会の精神』を次世代へ！

～歴史を超える未来を共に創り上げよう～

～感謝～

秋の訪れが感じられた9月3日の櫻華塾。一冊の会筆頭最高顧問赤松良子先生の米寿のお祝いの会(8/13)の後、初の櫻華塾とあって、パイオニア精神に燃え、赤松先生の精神を受け継ごうと新たに発足したパイオニアグループをはじめ皆一段と意欲に溢れての参加。新しい力が一冊の会に加わり新たな未来へ踏みだしました。

8月13日 赤松良子先生の米寿のお祝いに参加して

お祝いの会で「あざみの歌」を披露した佐藤玉美さん。「当日は大変緊張しましたが、先生のおかげで今の私があることに感謝を込めて歌いました。」と述べられ、気持ちのこもった美しい歌声を一同思い出しました。

北川ゆかりさんはロイヤルグループを代表し「今まで、1つ1つ大真面目に取り組んで来ましたが、一冊の会は生涯教育がスローガンです」と発表。参加出来た喜びで終わるのではなく、一冊の会のメンバーであることに誇りを持ち常に学んでいく姿勢を示して下さいました。

今回のお祝いの席で注目すべき点は、当日配布した冊子です。赤松先生の活動と一冊の会の活動を時間軸で、大槻会長が纏めたものです。1965年にサロンから始まり「法女性学・赤松学校・山下教室読み合わせ分校」と発展し、50周年を迎え、第二章櫻華塾発足までの歴史を纏めたものです。冊子の挿絵には「母なる海」のごとく寛大で優しい赤松先生をイメージした海や夏をモチーフとしたイラスト入りです。この素晴らしいイラストはヤンググループの赤田さん、瀧川さん、山内さんが仕事の後、事務所へ通い作成。イラストつきの“世界に一つしかない冊子”には一は壁を破る(輪読)・二は、反戦・平和(赤松良子インターネット配信)・三は他を思いやる心(東日本大震災)塾生の学びの基本となり、次の世代へ発信する貴重な資料となることでしょう。第1章の50年間を壁と向き合いながら築きあげた先輩への、感謝を忘れないで欲しいという、大槻会長の思いを受けて、会場は温かい拍手に包まれました。

一冊の会の精神を次世代へ

52年を迎え多岐に渡る活動を展開し、持続している一冊の会。すべての活動を通じて共通しているのは、「一冊の会の歴史を学び、時代を視て自ら考え、真心で行動し、新しい未来を切り拓き、後世へ伝えること」。

この度新設されたパイオニアグループのリーダー鬼童事務局次長より、一冊の会の活動や報告をいち早く！世界の友が都合の良い時間に見られるように、今後Youtubeで情報を発信していく旨の報告がありました。これは「一冊の会赤松良子世界Youtuube配信」として伝え、新たな第一歩を踏み出しました。

南相馬市への植樹～未来への希望を託して

8月24日、赤松良子先生の誕生日当日に大変嬉しいニュースがありました！と小山副会長。赤松先生を始め多くの有識者の皆さまに、あたたかく見守られながら推進している「復興祈念植樹」。東日本大震災の被災地の復興を願って「雪香プロスパーポローニア」を植樹。2018年に南相馬市で開催される“全国植樹祭”。お祝いを込めて植樹することが決定しました。

大槻会長と小山副会長は24日に南相馬市の桜井市長と打ち合わせをしました。「復興祈念植樹」が決定ととの大変嬉しいニュースに一同大喜び。南相馬市は福島原発から30^{km}圏内に位置していることから震災直後、立ち入り禁止区間と指定された地域です。ようやく帰還を許され、本格的に復興に向けて始動が始まりました。

世界が被災地の復興を注目しているこの地で2018年、全国植樹祭が天皇・皇后両陛下をお迎えして開催することになっております。一冊の会では震災後から、成長が早い「雪香プロスパーポローニア」と名付けた早成桐を被災地に植樹し、成長を見守って来ました。今年の春には、ピンクの見事な花を咲かせた「雪香プロスパーポローニア」。震災を乗り越え、力強く美しく咲き誇った見事な花を、被災者達は感動の思いで愛でたとのこと。まさに「時代の先を視る」一冊の会の震災支援活動。その中でも「復興祈念植樹」は今や多くの有識者の間で注目の的となっております。

立谷秀清相馬市長著 『東日本大震災 震災市長の手記』～輪読へ

「一冊の本から世界へ」そのスローガンを掲げ52年間、一冊の会では多くの本を輪読して参りました。この度東日本大震災で立谷市長を中心に、一丸となって復旧・復興に取り組んだ、相馬市長の手記が出版されることになり、大槻会長、小山副会長が相馬市を訪れた際、立谷市長より出版前の本をいち早く頂き、本に『一冊の会様』とサインを書いて下さいました。



2011年の震災直後、直ぐに被災地へと向かった大槻会長と小山副会長。先ず相馬雪香先生の縁の地、相馬市へと車いっぱいの支援物資を自動車に積み込んで伺いました。その当時から立谷市長は一冊の会の活動を評価して下さい、これまでに多くの震災支援行事にて協力を頂きました。震災当日、被災者の一人でもあった立谷市長。リーダーとして先頭に立ち戦い続けた日々を思うと胸が痛くなり、その粉骨砕身の市民を思う精神に最敬礼です。

一冊の会では支援活動の一つ、語り部として震災を後世へ繋いでいく活動をしております。被災者に心を寄せ続けて参ります。立谷市長の手記を輪読し、後世へしっかり語って参ります。

長谷川仰子さんの講演

今回の講師は、(一社)アフリカ開発協会事務局長の長谷川仰子さんです。アメリカに留学、ルネサンス時代を専攻。ルネサンスに影響され、ピカソやイブサンローランもアフリカに影響を受けたとのこと。一部抜粋。



様々な国の人達と交流する中で、先進国の人達はアフリカ大陸を総じてアフリカ国と思っている印象でした。アフリカは54か国です。文化も宗教もそれぞれ国によって異なります。

アフリカ開発協会は1969年に岸信介元総理が発起人の一人となって始まり、2008年から矢野会長が代表をしています。協会の役割も時代とともに変化し、今はアフリカと日本の企業のマッチングが主な役割です。現在、アフリカの駐日大使は38名。そのうち女性は5人。アフリカの女性はパワフルです。経済格差もありながら、女性も社会進出をしています。

アフリカ開発協会は、人を繋ぎ、仕事に大義をもって取り組んでいます。協会はアフリカ医療への貢献やそのためのネットワークづくりをしております。通訳をする時、間違えないように、言葉がちゃんと伝わる

ことを第一に、先方と会話が弾むように心がけています。日本の企業は、アフリカを「遠い」「インフラが無い」「病気がある」と思ってまだまだ魅力を感じていません。ただ日本企業の為に誘致するのではなく、アフリカの人のためになる開発でなければならないと思っております。今日ご紹介下さった大槻会長は私の仕事を、心を伝えて温かみのある通訳と評して下さいました。場数を踏む事により、アフリカのことを自分の問題として考えられるようになりました。

特に心を揺さぶられた事は「自然を怖いと思うから人は生きられる。」

＝タンザニアのキクウェテ元大統領の御言葉＝そのままの感情を受け入れる事が“生きる”ということ。

「自由を貴女は持っているでしょう。それを持って一歩前が出る事が“生きる”事ではないの？」

＝南アフリカのシスル前大使が日本を離れる時の一言＝

講演にはハッとすることも多く、沢山の気づきを得ました。終始包み込むような温かさで語ってくださり、ドキッとするのではなく、自分の胸に手を当ててじんわりと考えさせられる…そのような語り口でした。温かな人柄がにじみ出ているようで、さすが心を伝える通訳をされている方だと感じました。



最後に石田理事長が「赤松先生の米寿のお祝いは大成功でした。会の成功の立役者！大槻会長に、皆で感謝の拍手をしましょう！」と呼びかけ塾生が一斉に心の籠った拍手と共に、石田理事長の優しさと会長の労を^{ねぎら}う心配りに、感動する一幕も。

さらに理事長は「1人1人に心があるからです。一冊の会が52年間続いているのは先輩方が自らを厳しく律してきたから。」と締めてくださいってから、「長谷川さんを新たな一冊の会の仲間として迎えましょう！」と呼びかけくださり、一同大拍手！

『名誉・地位・財産・学歴・国籍・年齢・男女を問わない会』超党派である一冊の会。その52年間の長い歴史の活動は未来へと、繋がっています。新しい歴史を創り上げてまいりましょう！



会の終了後、サプライズで大槻会長の誕生日を祝いました。

東日本大震災で甚大な被害をもたらした津波

東北の被災地に復興のシンボルとして植樹してきた「雪香プロスパーポローニア」。早成桐は成長が早いことから一冊の会では、「復興祈念樹」として7か所に植樹して参りました。今日まで順調に生育しています。春、桜が散り終わる頃縦7cm横3cmの薄紫に少しピンクかがった桐の花が満開になります。被災者に寄り添い心を和ませてくれます。今日まで地道な活動を推進し・実現できたのも、一冊の会東北担当理事の齋藤篤氏が地元・市・町への地道な交渉をして戴いた賜です。持続の結果、今では有識者の皆様からも賛同のお言葉を頂戴する時代を迎えることが出来ました。改めて齋藤理事に心から感謝。一冊の会一同感謝・・・

尚9月には南相馬市に「復興祈念樹」を植樹致します。

文責：平間・城杉・瀧川・赤田